『枕草子』の原態を求めて

――三巻本枕草子と能因本枕草子の比較を通して――

飯島裕三

はじめに

『枕草子』には、三巻本、能因本、前田家本、堺本の四系統に分類される伝本が存在している。だが現在我々が目にする『枕草子』のテキストは三巻本系の諸本を底本にすることが普通で、他の系統の本文を目にすることはほとんどない。以前には小学館から三條西家旧蔵本を底本とする能因本『枕草子』が刊行されたことがあった。しかしその本も絶版となって久しい時間が経ってしまったが、最近笠間書院より改訂公刊されたので、(注二)能因本系の本文及びその口語訳を再び目にすることが可能となった。この原本は現在学習院に貴重書として所蔵されているが、筆者が大学院に在籍中、恩師の松尾聰先生から、その本が三條西家から学習院に寄贈されることに至った経緯や、能因本系の本文を軽視し、三巻本『枕草子』一辺倒に傾く最近の風潮に対する危惧をよく伺った。そういう経緯もあり、能因本『枕草子』には以前から関心を持ち、それを引用しつつ授業を行うようなことも時々行なってきた。そのような三巻本と能因本の本文を比較する過程で、時に平安王朝人の思考を新たな視点から垣間見るような驚きを経験した。そこで、三巻本と能因本との違いを通して『枕草子』とは何かを一度じっくり考えてみたいと思うようになっていた。

先に現在の『枕草子』のテキストは、その底本に三巻本『枕草子』をほとんどが使用していると述べた。それは取りも直さず三巻本『枕草子』が現存する諸伝本中で最善本であるという認識が定着していることを意味している。しかし『枕草子』享受の歴史からいうと、江戸初期に成立した古活字本『枕草子』以来昭和の初期までの三百年間、『枕草子』は能因本系の諸本によって享受されてきたのである。長い期間に渡り『枕草子』といえば、それは能因本のことであった。その能因本を排除し、三巻本『枕草子』が中心的なテキストとして採用されるに至った背景には、戦前戦後の本文研究の成果があったことはもちろん否定できない。しかしながら諸家の研究によく耳を傾けると、三巻本こそが最善本で能因本には価値がないという意見で研究者の意見が一致しているわけではない。現存する伝本の中では、三巻本が他の系統に比べて比較的古態を有しているであろう、という慎重な態度をとる研究者も多いのである。それと注意すべきことは三巻本の数種の写本の中で、その純粋度を最も保つといわれて

いる一群の写本（以下「一類本」と呼ぶ）のどれもが第一巻「春はあけぼの」から「あぢきなきもの」まで全体の二十五％に相当する分量を欠如しているのである。その欠損箇所は一類本に比べてその純粋度が落ちるといわれる二類本によって補填され、全体の体裁を整えているのが三巻本の実態なのである。この事実を無視してはならない。

さて先にも述べたように『枕草子』には大きく四系統の異本が存在する。それらの本文間の異同は、『源氏物語』における青表紙本系と河内本系の相違どころではなく、場合によってはほとんど別の作品という印象を受ける章段も存する。この異なった本文をそれぞれ授業の現場に持ち込めば、『枕草子』という作品そのものの明確な輪郭が消え失せてしまう危険性さえ孕んでいる。そこで異本間の優劣問題は解決済みとし、三巻本以外の本文を排除すれば本文解釈上のストレスは減少し、教える側にとっては誠に好都合なことになる。このような背景も能因本が脇に追いやられる一因になっているのではないだろうか。しかし『枕草子』の実態に迫り、その本質を究明しようとする時には、三巻本以外の他の諸本を無視していては『枕草子』の本当の姿は見えてはこない。そこでこの小論では『枕草子』の諸伝本を概観し、そこから特に三巻本と能因本との関係に注目して、『枕草子』の成立過程やその題名の由来について考察し、『枕草子』の原態がどのようなものであったかを探究してみたい。

一　『枕草子』の諸伝本について　――特に、三巻本と能因本の性格について――

さて『枕草子』の伝本は先にも述べたように大別して四系統あり、その四系統も雑纂形式と類纂形式の二種類に分けられる。この作品はその書かれた内容によって大まかに随想的章段、日記的章段、類聚章段と分類されるが、それらが入り混じって雑然と並んでいるものが雑纂形式であり、意識的にまとめられ整理されているものが類纂形式である。その四系統とは次のようになっている。

雑纂形式
　三巻本（安貞二年奥書本）
　能因本（伝能因所持本）
類纂形式
　前田家本（前田旧公爵家尊経閣所蔵）
　堺本

この四系統の分類は池田亀鑑博士の研究によるもので、[注一]諸本間の異同は章段によっては同じ作品と呼ぶことを躊躇させるほど大きなものもある。ただ前田家本に関しては楠道隆氏の研究によって、「堺本と能因本を底本として、集成して作られた鎌倉初期以前に改変された改修本である」ということが明らかにされている。[注二]また、堺本については『枕草子』の最も原態に近いものであるという説も以前にはあったが、田中重太郎氏によれば「堺本系統本は、おそらく中世において、後人が枕冊子の本文の一部を類纂し、それに注釈的意図による本文の校訂を加えたものと思われる」。[注四]といわれるように、他者の手が加えられ不純度を増したものだと現在では考えられている。このように類纂形式の諸本の実態が明らかになるにつれ、より原態を有すると考えられる三巻本と能因本が注目され、その優劣が学界の中心的な関心事となり、多くの論考が提出されてきた。その点をまとめたものとして石田譲二氏の角川文庫『枕草子』の解説を引用すれば、

三巻本

現存伝本の多くが三冊に分冊されていることからの名称で、その奥書の最も古いものに「安貞二年三月　耄及愚翁」とあるので安貞二年奥書本と呼ばれることもある。鎌倉時代初期の安貞二年（一二二八）耄及愚翁なる戯名の人物によって書写され、本文行間および巻末に勘物（今の注にあたる）の付けられたテキストである。安貞二年の奥書によって知られるところでは、そのころに既に善本がなく、新しく書写したこの本にも、本文に不審の箇所が多々あることが嘆かれている。この系統の本はさらに一類、二類に分類される。一類の方が三巻本としては純粋で、二類本は、一類本を主として堺本によって校訂し、さらに独自に本文の改訂を図ったと思しき箇所もある。要するに二類本は堺本との接触によって汚染された本文ということができよう。遺憾なことに、一類本は初段「春はあけぼの」から、「あぢきなきもの」（七十五段）まで、全体の約四分の一にあたる最初の部分が失われており、この部分は二類本によるほかはない。

能因本

能因本の現存伝本は、書写の過程においてかなり大きな損傷をこうむっている。たとえば人物の官位呼称など、杜撰な点も多々目につき、三巻本の優秀性は動かないことのように思われる。さらに問題なのは、両本の語彙、文体であって、三巻本は、無造作で乾いた日常語的性格が強く、能因本は、よりなだらかで情緒的な雅文的性格が強い。加えて、能因本には、少なくともとの形に後から手を加えたかと思われる箇所が目につく。全体的に見て、三巻本→能因本という過程は考えられても、能因本→三巻本という逆の過程は考えがたい。三巻本は初稿本の面影を、能因本は作者の再稿本の面影をとどめるものではないかとの田中重太郎博士の観測もあり、あるいはまた三巻本、能因本それぞれに別々の編集者をかんがえるべきではないかとする楠道隆氏の見解もある。しかも、三巻本から能因本へという改訂

の過程しか全体的には考えられない以上、能因本の文章は後人の改訂の手の加わった文章であり、三巻本の文章を、少なくともより作者の原作に近いものと考えざるを得ないであろう。個々のケースについては問題があるにしても、全体的に見るときは、この判断は動かしがたいように思われる。（中略）三巻本の優越性が主張されるあまりに、その本文が絶対視されることは危険であって、能因本以下他系統本文の持つ本文校勘上の資料的価値も冷静に認められなくてはならぬであろう。(注五)

つまり石田氏のまとめられるところでは、現在の研究段階では、総体として三巻本が能因本よりも勝れているだろうと考えられる。しかし個々の章段の一つ一つの事項については、その優劣が決定されているわけではないということである。しかも解説の中にもあったとおり、現存する三巻本の中で一類本には、「春はあけぼの」から「あぢきなきもの」までの部分が欠落し、その欠損箇所は堺本によって汚染された二類本によって補われている。

こういう事情を考慮するならやはり能因本は無視することのできない本文であり、特に二類本で補っている欠損個所については、能因本との対照によって『枕草子』の原態を考える姿勢がぜひとも求められるべきだと考える。先にも述べたように永井和子先生が三條西家旧蔵本を底本とする『枕草子』を改訂公刊されたので、現在は能因本を容易に目にすることが可能になっている。そこで次章からは両者の比較検討を通して作品の成立事情や題名の問題を考え、さらに『枕草子』の第一段「春はあけぼの」の章段を中心に原『枕草子』の姿の一端を明らかにしたいと思う。

二　跋文から『枕草子』の成立過程を考える

三巻本と能因本のいわゆる跋文は『枕草子』の成立事情を考えるうえで重要な資料となる。この二種のテキストの跋文を比較すると、三巻本で一章段に記されていることが、能因本では三二一段と三二二段に分轄され、しかも続く三二三段では再びその両者が一つの章段にまとめられたような構成になっている。この事実は能因本の跋文の成立過程に、後から手が加えられた可能性を示唆している。ただ跋文の内容自体は三巻本、能因本の両本ともに、「この草子をしっかりと隠しておいたが、ある日、伊勢守が作者を訪れた時に誤って渡してしまった。その後この草子が流布し始めた」という『枕草子』の世上への流布のきっかけが語られていることで大筋は一致している。しかし今回は両者間に存する異同にこだわり、そこから見えてくる『枕草子』の成立過程に迫ってみたい。

【能因本】（三二一段）物暗うなりて文字も書かれずなりにたり　筆も使ひ果ててこれを書き果てばや　この草子は　目に見
【三巻本】　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　この草子・　目に見
【能】え心に思ふ事を　人やは見む・ずる　と思・ひ・　つれづれなる里居のほど・　書き集めたるに・　あいなく人のため
【三】え心に思ふ事を　人やは見んとする　とおもひて　つれ〴〵なる里居のほどに　書きあつめたるを　あいなう人のため
【能】・便・なき言ひ過ぐしなどしつべき所々あれば　清う隠し・・たりと思ふを涙せきあへずこそなり・にけれ宮の御前に
【三】にびんなきいひ過しもしつべき所〴〵もあれば　よう隠しおきたりと思しを心よりほかにこそ漏り出にけれ宮の御前に
【能】内の大臣の奉りたまへり・し御草子をこれに何・を書かましと　うへの御前には史記といふ文をなむ書かせたまへると
【三】内の大臣の奉りたまへりける・・をこれになにを書かまし・　上・の御前には史記といふ文をなん書かせ給へるなど
【能】のたまはせしを　枕にこそはしはべらめと申ししかば　さは得・よとて給・はせたりしを　あやしきをこしや何・やと
【三】のたまはせしを　枕にこそは・侍・らめと申し・かば　さは得てよとてたまはせたりしを　あやしきをこよやなにやと
【能】つきせずおほかる紙の数を書きてつくさむとせしにいと物おぼへぬ事ぞおほかるや
【三】つきせずおほかる紙・・を書き・つくさんとせしにいと物おぼえぬ事ぞおほかるや

●「三巻本」の引用本文は、新日本古典文学大系『枕草子』三四八～三四九頁による。以下「三巻本」の引用は同書による。

●「能因本」の引用本文は、笠間文庫『枕草子』三六四～三六五頁による。以下「能因本」の引用は同書による。

（なお、「・・・」の箇所は、他本には存在する本文が、その本では存在しないことを示す。）

三巻本、能因本の前半部の比較を通して気づくのは、一部の記述を除くと両者の異同が極めて少なくその本文の関係が接近していることを予測させる。どういうことかと言えば、両者の親本が同一であった可能性が高いということである。しかしながら二箇所に無視できない大きな異同のあることも注目される。まず能因本（三二一段）の最初だけに「物暗うなりて、文字も書かれ

ずなりにたり　筆も使ひ果てて、これを書き果てばや」という独自異文が存在することである。「物暗うなりて」については、「老眼」説や「夕暮れ」説もあるが、[注六]原『枕草子』の成立が定子の崩御された長保二年（一〇〇〇）の頃だとすると、康保三年（九六六）頃の生まれだと推測される清少納言はまだ三十代半ばであり、老眼年齢にはまだ早いかと考えられる。「老眼」説に固執するならこの一節が書かれたのは定子の崩御よりも十数年ほど後と考えるのが穏当だろうか。また「夕暮れ」説を採った場合、「筆も使ひ果てて」（筆も使い切って）とどのように文脈上関連するのかが理解しがたい。それらを勘案したのち、この記述を長保二年十二月十六日の定子皇后崩御に対する清少納言の衝撃と絶望の心境を述懐したものとするなら無理なく受け止められるのではないかと思う。『枕草子』という作品は定子からの紙束の御下賜によって書き起こされた、と跋文には認められている。だからその作品は中関白家一族の栄光を描き、とりわけ定子に読まれその喜びとなることこそが存在理由であったのではないか。ならば『枕草子』の最も重要な読者である定子の死は、その作品の存在理由の消滅を意味することになる。主を失った今、悲しみのあまり涙にかき暮れる目には「物暗うなりて」と世界が感じられ、いまだ書き残された定子との思い出を「筆も使ひ果てて これを書き果てばや」という悲痛な叫び、つまり「まだ書ききれていない定子との思い出を一刻も早く書き終えたい。そうして今後はもう筆を断つ」という意味と解釈する時に前後の文意が納得されるのではないか。この一文が作者自らの手になるなら、従来『枕草子』が何故没落していく一族、そして定子の悲運、悲嘆を意識的に抹消していたのかが、この跋文に漏らされた言葉によってあらためて確認されることになる。つまり清少納言という存在は中宮定子をとりまく厳しい現実世界を、一時的にせよあたかも栄光に彩られた仮想現実として提供することが彼女の役割であったのではないか。その対象であった定子の崩御は、もはや清少納言の役割（存在理由）が終了したことを意味する。ここに人工的に構築された世界は終焉を迎え、現実の「物暗うな」った世界が立ち現れたのである。その悲しみの中でも『枕草子』を書き上げることが亡き定子への最後の務めと清少納言は考えたのではないか。三巻本には存在せず、能因本のみに記されるこの定子崩御に対する悲痛な叫びは、清少納言本人の心の叫びと捉えるべきものだと思う。こうした一文が能因本のみに存在する理由は先に引用した石田氏の解説にもあったように、三巻本をより初稿本に近いと考え、そこに清少納言自らが後から自分の思いを付け加えた本文が能因本であることの証になるのではないか。またもう一個所は三巻本にはなく、能因本のみに記される「涙せきあへずこそなりにけれ」である。このことに関しては次章で『枕草子』の題名を考察する際に再度取り上げ詳細はそちらに譲るが、この箇所に関しては引き歌として『古今和歌集』の「枕よりまた知る人もなき恋を涙せきあへずもらしつるかな」（平貞文『古今和歌集』恋三）が考えられ、『枕草子』という題名の成立にも関与している可能性が大きい。この箇所に関しても三巻本がこれだけ重要な記述を削除する可能性は低いと考えられるので、むしろ能因本の方が後から手を加えられた本文だと考えるべきだろう。ただ手を加えた人物が作者なのか、それとも第

三者なのかが問題となるが、ここもやはり作者本人の手になるのではないかと私は考えている。このことも次章でより深く考えてみたい。

次に残った三巻本の後半部と、それに該当する能因本との比較を通してさらに両者の考察を続ける。ただしここは本文に大きな異同が存するので、それぞれの本文をそのまま並べて考察する。

【三巻本】

左中将まだ伊勢の守ときこえし時、里におはしたりしに、端のかたなりし畳をさし出でしものは、この草子乗りて出にけり。まどひ取りいれしかど、やがて持ておはして、いと久しくありてぞかへりたりし。それよりありきそめたるなめりとぞ本に。

【能因本】

（三二二段）左中将のいまだ伊勢の守と聞こえし時、里におはしたりしに、端の方なりし畳をさし出でし物は、この草子も乗りて出でにけり。まどひ取り入れしかども、やがて持ておはして、いと久しくありてぞかへりにし。それよりそめたるなめりとぞ。（三六五～三六六頁）

（三二三段）権中将のいまだ伊勢の守と聞えし時におはしたるに、端の方なる畳押し出でてすゑたてまつりしに、にくき物とは、草子ながら乗りて出でにけり。まどひて取らむとするほどに、長やかにさし出でむかひなつきもかたはなるも思ふに、「けしきの物かな」とて、取りてやがて持ておはしにより、ありきはじめて、済政の式部の君など、つぎつぎ聞きてありきそめて、かく笑はるるなめりかしと。（三六六～三六八頁）

さて三つの文を比べて分かることは、三巻本と能因本三二二段にはその前半部と同じく異同がほとんどないことである。それに比べて三二三段は前の二文とは大きく異なった内容になっている。一言で言えば三二三段は状況の説明が一段と詳しくなり、情報量が増加しているといえよう。ここでいう「伊勢の守」とは源経房のことで、三巻本および能因本三二二段では「左中将」、能因本三二三段では「権中将」となっている。

ところで史実を調査すると、経房は長徳元年（九九五）正月十三日に「伊勢権守」に任じられている。そして長徳二年（九九六）七月二十一日「右近権中将」に任じられ、続いて長徳四年十月二十二日には「左近権中将」に任じられたことが『公卿補任』や藤原行成の『権記』などから判明する。このことから、「権中将」という表現は三巻本と三二二段にある「左中将」と同じだ

と一般的には考えられているようだ。また更によく史実を調べると、経房は長保三年（一〇〇一）八月二十五日に左近中将在任のまま蔵人頭に任じられている。蔵人頭に就任した後には通常「頭中将」と呼び慣わされることから、三巻本のように左中将とのみ呼ばれる時期は、長徳四年十月二十二日以降、長保三年八月二十五日以前の二年十カ月ほどの期間になる。つまりこれらの段は経房が「伊勢守」であった長徳元年正月十三日から同二年七月二十一日までの一年半ほどの間に起きた出来事を、後に源経房が「左中将」在任中の二年十ヵ月間のいづれかの時期に思い出して書き記されたものということになる。ところが、ここで問題になるのが（三二三段）のみに登場する「済政（なりまさ）の式部の君」である。源済政は、長徳二年正月二十五日に式部大丞に任命され（「長徳二年大間書」）、翌長徳三年正月二十八日には阿波権守に任じられている（陽明文庫本『枕草子』勘文）。ということは、済政を「式部の君」と呼ぶ時期は約一年間しかないことになる。済政はその後長保四年（一〇〇二）正月に信濃守に任じられるまで阿波権守を五年間勤めるから、経房を「左中将」と呼ぶなら、当然済政はその時期の官職であった「阿波守」と呼ばれなければ両者の官職名には整合性がなくなってしまう。経房と済政の官職名を一致させるためには、（三二三段）の「権中将」を左権中将ではなく、実は右権中将を指すと考えるしかない。結果として両者の官職名が揃う期間は長徳二年七月二十一日以降、長徳三年の正月二十七日までの半年未満という事になる。そして経房が左権中将ではなく右近権中将ということになると、当然、能因本（三二三段）だけは、三巻本と能因本（三二二段）よりも早い時期のことを述べていることになる。しかしながら頻繁に変わるそれぞれの官職名を半年という短い期間内に限定して正確に思い起こして話を進めるのは不自然な感が拭えない。こういう場合情報量が多く、その描写も精細になっている（三二三段）には後から手が加えられている可能性が高く、しかも内容に不審な記述があるなら、第三者によって書き換えられたと普通は考えられるところだろう。しかし（三二三段）のみに存する「長やかにさし出でむかひなつきもかたはなるも思ふに」という心情描写を第三者が書き加えることができるだろうか。やはりこの言葉が清少納言本人のものだとすれば、（私はその可能性が高いと考えているが、）作者が後になって『枕草子』に手を入れたときに官職名にも誤りが生じてしまったのではないかと考えている。

次に簡単な年表を付け加えておくので解釈の一助としていただきたい。

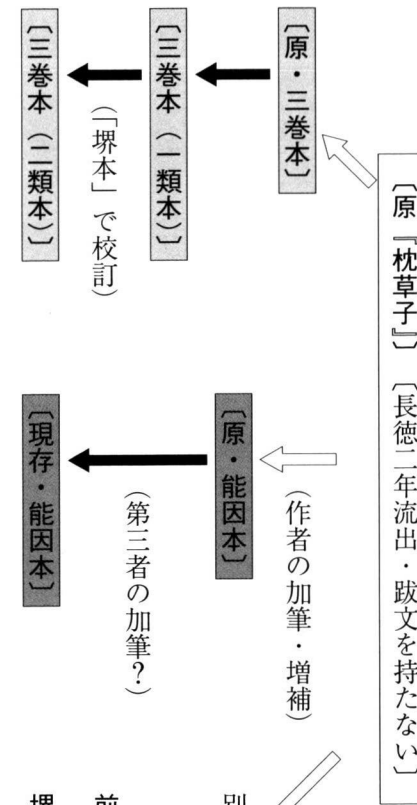
（略年表）

長徳元年（九九五）	正月十三日	源経房	伊勢権守となる	この頃 原『枕草子』流出か
長徳二年	正月二十五日	源済政	式部大丞となる	
	七月二十一日	経房	右近権中将となる	
長徳三年	正月二十八日	済政	阿波権守となる	
長徳四年	十月二十二日	経房	左近権中将となる	経房「左中将」と呼ばれる期間
長保三年（一〇〇一）	八月二十五日	経房	頭中将となる	
長保四年	正月	済政	信濃守となる	

現在では登場人物の官職名などから考えて、『枕草子』には寛弘六年（一〇〇九）から寛弘七年（一〇一〇）ころまでの記事が書かれている可能性があることがわかっている。つまり以上の三巻本・能因本の跋文の成立時期では到底すべての記事内容をカバーできないということである。そこから『枕草子』の成立過程を考え直すと、最初に流布し始めてから数度にわたって手が加えられ、それを何回か繰り返した後に現在のような形になってきたことが想定される。それが三巻本・能因本の跋文の形態に痕跡として残っていると考えればいくつかの事実も説明できるようだ。三二一段の「物暗うなりて、文字も書かれずなりにたり。筆も使ひ果てて、これを書き果てばや。」という異文が能因本だけに存在し、また官職名に違いが生じているのも、能因本に後になってから手が加えられたためだと思われる。これらのことを総合的に考えると、『枕草子』は長徳二年（九九六）七月二十一日から同四年十月二十一日の間までに一度人々の間に出回り、最も初期の原『枕草子』が出現した。その原『枕草子』には当然現在見られる跋文は付加されていなかったはずである。そしてその数年後により増補された第二期の『枕草子』が出回ることになった。それが現在の跋文を有した三巻本の原形であり、定子崩御の直後に再度校訂された『枕草子』が、現存する能因本の原形と考えると「三二一段」「三二三段」に同じように「涙せきあへずこそなりにけれ」という独自本文の存在理由が理解できるのではないだろうか。定子が崩御し跋文が書かれた後にもなお作者は定子との思い出を中心に『枕草子』を書き継いでいったと思われるが、そのために『枕草子』はその成立当初から異なる本文を持つものが数種類存在していたと考えられる。そのうえ中関白家の衰退は権力の後ろ盾を失った作品の価値をも貶めたと想像される。何故なら後人による書写の過程で恣意的な文章改竄は無論、作品全体が編集しなおされ、類纂形式という形で今日伝えられている『枕草子』の存在がその証拠である。藤原道長の栄光と権力を背景にした『源氏物語』とは異なる運命が『枕草子』の書写過程に影を落としたということになる。

以上の『枕草子』の成立過程を図式化すれば次のようになろう。

「成立過程」概観



原「能因本」に第三者の手が入っている可能性も否定できないが、あったとしてもそれがどの部分かについては判然とはしない。それは三巻本にも同じことが言えよう。ただ重要なことは三巻本と能因本に本文上の異同はあっても、そのどちらにも作者本人の意思が籠められている可能性が高いことである。そこから導き出される結論は、つまりは三巻本と能因本の優劣を決めることのみに専心する態度は、『枕草子』の本質を見誤ることになる可能性が高いということになる。今でこそ三巻本に最善本の地位を譲ったかに見える能因本の中に、むしろ作者の真情が吐露されている可能性があり、そのためにも三巻本と能因本の厳密な比較対応が今後とも求められなければならない。そういう姿勢で作品に立ち向かわなければ、『枕草子』はその真の姿を我々には見せないということである。

三　『枕草子』という題名を考える

ところで『枕草子』という題名がなぜ付けられたかというと、実は諸説錯綜していて定説がないというのが現状である。しかし三巻本の

宮の御前に、内の大臣の奉りたまへりけるを、「これになにを書かまし、上の御前には、史記といふ文をなん書かせ給へる」などのたまはせしを、「枕にこそは侍らめ」と申しかば、「さは、得てよ」とてたまはせたりし（三巻本）

という一節が関与していることは間違いないと思われる。この箇所については能因本でもそれほど大きな異同はないが、ここで定子の「上の御前には、史記といふ文をなん書かせ給へる（能因本では「うへの御前には史記といふ文をなむ書かせたまへる」）という報告に対し、「枕にこそは侍らめ」（能因本では「「枕にこそはしはべらめ」」）という清少納言の回答が、定子の「さは、得てよ」（能因本では「さは得よ」）という発言を導き出すにきっかけになっている。「新日本古典文学大系」はこの部分に次のような脚注を施している。

「枕草子」の由来らしい大切な所で、諸説があるがよくわからない。帝側の「史記」を沓底の「底（しき）」と取りなし、こちらは頭の「枕（歌枕の類）」を、と言ったものと見る解を支持しておく。

（渡辺　実　新日本古典文学大系『枕草子』三四八頁）

果たしてこの解釈に問題はないのだろうか。まず定子が何故帝側を沓底と見なし、自分（中宮）達を頭に見立てるほどの対抗心を持たねばならないのであろうか。このような発想を持つ理由が私には理解しがたい。むしろここでの清少納言と中宮定子のやり取りを見て想起されることは、例の香炉峰の章段である。

雪のいとたかう降りたるを、例ならず御格子まゐりて、炭櫃に火をおこして、物語などしてあつまりさぶらふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならん」と仰せらるれば、御格子あげさせて、御簾をたかくあげたれば、笑はせ給。人々もさることはしり、歌などにさへうたへど、「おもひこそよらざりつれ。猶此宮の人にはさべきなめり」といふ。

（新日本古典文学大系　二八〇段）

「おもひこそよらざりつれ。猶此宮の人にはさべきなめり」という、打てば響くような清少納言の行動が、中宮定子の「笑はせ給」という賞賛の笑いを誘うことになった。『枕草子』という作品は、定子からそのような「笑い」を引き出し、ひと時の慰安を与えるようなことが本来の使命ではなかったかと前にも述べたが、そういうやりとりが、この場面でもなされていると考える

べきではないか。「香炉峰の雪」の背景には当時人口に膾炙された『和漢朗詠集』などの知識が当然あったはずである。それに対してここはやはり、当時誰でもが知っている和歌の掛詞の技巧を考えることが最も自然だと思われる。例えば万葉集の人麻呂の長歌の一節にある、

波の音のしげき浜辺をしきたへの枕になして（敷妙乃枕尓為而）荒床にころ伏す君が

（新日本古典文学大系『万葉集』一　二二〇）

また『古今和歌集』には

読み人知らず

わが恋を人知るらめやしきたへの枕のみこそ知らばしるらめ

（『新日本古典文学大系』「古今和歌集」巻十一　恋一　五〇四）

友則

しきたへの枕のしたに海はあれど人をみるめは生ひずぞありける

（「古今和歌集」巻十二　恋二　五九五）

修理大夫惟正が家に方違へにまかりたりけるに、出だして侍ける枕に書き書き付け侍る

藤原義孝

つらからば人に語らむしきたへの枕かはして一夜寝にきと

（『新日本古典文学大系』「拾遺和歌集」巻十八　雑賀　一一九〇）

忠君、宰相雅信が娘にまかり通ひて、ほどなく調度どもを運び返し侍ければ、沈の枕を添へて侍けるを返しおこせたりければ

読み人知らず

涙川水まさればやしきたへの枕の浮きて留まらざるらん

（「拾遺和歌集」巻十九　雑恋　一二五八）

讃岐の狭岑（さみね）の島にして、岩屋の中にて亡くなりたる人を見て
人麿

浪寄る荒磯をしきたへの枕とまきてなれる君かも　（「拾遺和歌集」巻二〇　哀傷　一三一六）

挙げればきりがないが、これらの用例は「しきたへの」という枕詞によって導きだされる「枕」が当時自然な言葉の連想ゲームであったことを物語っている。「新日本古典文学大系」の注にあるような、相手の上を行こうとするような発想とは異なり、清少納言の機知を働かせたいかにも中宮定子の周辺で好まれるやりとりとなる。中宮定子がすぐにそれを肯ったことにも不自然さは感じられない。恐らく「枕にこそは侍らめ」と言った清少納言の言葉の直後には、香炉峰の時と同じように「笑はせ給ふ」中宮定子の姿があったに違いない。そうしてめでたく「さは、得てよ」と、紙の束は清少納言に下賜されたのであろう。

ところで、三巻本に「心よりほかにこそ漏り出でにけれ」（心ならずも世間に洩れ出てしまった）という箇所が、能因本では「涙せきあへずこそなりにけれ」となっている箇所が気になるところである。この箇所については前章でも言及したところであるが、「涙せきあへず」という文言は『古今和歌集』恋三・六七〇、平貞文

枕よりまた知る人もなき恋を涙せきあへずもらしつるかな

しか考えられないから、この歌を本歌としていることはまず間違いない。そこから考えられる『枕草子』という題名に込められた意味は「枕以外には誰にも知られていないあの方への秘かな想い」、その秘めたあれこれの想いを綴った文章ということになる。それを心ならずも外部へ漏らしてしまった、ということになろう。この記述が能因本の三二一段と三二三段の二箇所に記載され、三巻本に存在していないことは、能因本の編集過程で作者の手によって加えられたと想像される。私は『枕草子』の命名の謎を解く鍵がこの一文にあると考えている。この引き歌が暗示することは「枕よりまた知る人もなき恋」のごとき、清少納言のプライベートな想いを綴った内容を持つもの、ということになろうか。それは作者の独特な感性で描かれた日常や森羅万象に及ぶものであり、無論そうは言っても中宮定子にはお見せするはずのものであった。ここから『枕草子』の「枕」は清少納言が定子に「『枕』に致しましょう」と言った表面的な意味の他に、定子という主人に対する秘められた愛情が語られた作品であったことを証するものだと考えている。「枕よりまた知る人もなき恋」のような定子に対する密やかで深い想いが「枕」という言葉に込められている。この事実は三巻本が最善本という位置づけを与えられてからは本文自体が無視されてしまったため問題に

されずにきたが、実は『枕草子』の題名を考えるうえできわめて重要な意味を持ち、能因本によって初めて明らかにされることなのである。おそらく『枕草子』という題名は、この一文が書き加えられて作者か、事情を知る周辺の人物によって命名されたものであろうと、私は考えている。

なお「題名」については従来次のような事例が引合に出されるので一応考察しておこう。

『栄華物語』巻二十四「わかばえ」で皇太后妍子の大饗が催される場面に、女房達が出衣をする様子が描かれるがそこに、

衣の褄重りて打ち出だしたるは、色々の錦をまくらさうしに作りて、うち置きたらんやうなり。重なりたるほど一尺余ばかり見えたり。あさましうおどろおどろしう、袖口は丸み出でたるほど、火桶のささやかならんを据ゑたらんと見えたり。

（「日本古典文学全集」『栄華物語』「わかばえ」四四八頁）

という一節があり、当時普通名詞として「まくらさうし」という言葉が存在していたことが窺える。しかしそこには清少納言の『枕草子』という題名に蔵された深い意味は全くない。

また『往生要集』の著者として有名な恵心僧都源信に、『枕雙子』という著作があることが知られている。別名『一心三観枕草子』・『恵心枕雙紙』・『源信枕草子』とも様々に呼ばれるこの著作は、天台本覚思想に関する口伝を集めたもので、本覚思想の代表的文献に挙げられ「長保三年（一〇〇一）三月下旬」という奥書を持ち、その最後の箇所に、

慕知甘露門者、以之昼座置右、夜置枕上、思之観之（甘露の門を知らんと慕う者は、これを以て昼は座して右に置き、夜は枕上に置きて、これを思ひこれを観ぜよ）

（田村芳朗 他校注 日本思想大系9『天台本覚論』四一〇頁）

とある。常に身近に置き、内容について深く吟味せよという意味で『枕雙子』という書名が付けられたことが分かる。奥書の年代が正しければ、清少納言の『枕草子』の成立当時に極めて近いものとして、その題名の成り立ちは無視できないものとなるが、実際の作者は源信よりも数代あとの忠尋（一〇六五～一一三八）の弟子の皇覚ではないかといわれている。[注七] 場合によってはそれよりももっと後の時代に成立したのではないかともいわれている。だとすると源信のこの『枕雙子』をただちに題名を解く参考にすることは出来ない。むしろ清少納言は「殿方のような難しい書物に仕立てるのではなくて、その紙の束を枕にして一休みいたしましょう」と、表面的には学問とは縁のない女の立場をアピールしているように見せかけて、実はその内容はあくまでも外

部には漏らしたくない、中宮定子への秘めや愛情を含む仲間うちだけに発信したものであり、現実世界がどのように厳しいものであろうと、中関白家の栄光があたかも事実として存在しているかの様に世界を再構成する役目が『枕草子』に与えられた使命であった。それは中関白家の没落とともにはかなく消え果る運命にあったのだが。つまり、『枕草子』という題名は当時存在した普通名詞に、全く新たに作者が命を吹き込んだ清少納言独自の造語であったということになる。

三　第一段、「春はあけぼの」の検証

『枕草子』第一段「春はあけぼの」を、三巻本と能因本を比較しながら実際に読んでみよう。(能)とあるのは学習院大学が蔵する三條西家旧蔵能因本であり、(三)は彌富破摩雄氏旧蔵本の三巻本（ただし第二類本。この本は堺本の影響を受けて純粋度が低下するといわれている）である。すべて『校本枕草子』を参照したものである。ただし、行の変更は内容に応じて適宜行なう。「・・・」の箇所は、他本には存在する本文が、その本では存在しないことを示している。

(能)　　　　　　　　　　　なりゆく
(三)　春はあけほの　やうやうしろく成・行・山きは　すこしあかりて、むらさきたちたる雲のほそくたなひきたる

(能)　　　　　　　　　なり　　　　・・・とひ　　　・・・・・・・・・・・・・・・
(三)　夏はよる　月の比はさら也・やみも猶ほたるの多く飛・ちかひたる　又たゝ一二なとほのかにうち光りて行もをかし

(能)　　の　さへお
(三)　雨なと・ふるも・をかし

(能)　　夕・　　花やかに　山きは　く　　ところ　　　　みつよつふたつ・・
(三)　秋は夕暮　ゆふ日の・・・さして山の端いとちかうなりたるに　からすのね所・・へ行くとて　三・四・二・・みつ

(能)　　　ゆ・　　は　　し　　　　　　　　　　　　・　　お　　入り
(三)　なと　とひいそくさへあわれなり　まいて鴈なとのつらねたるか　いとちいさくみゆるは　いとをかし　日入・はて、
(能)　　音・　虫・　音　　・・・・・・・・
(三)　風のおと　むしのねなと　はたいふへきにあらす
(能)　冬はつとめて雪のふりたるはいふへきにもあらす　なと　　く・　　　を
(三)　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　霜・・のいとしろきも　又さらてもいとさむきに　火なといそきお
(能)　　　　　　　　　　　　　　　なり　　　行・　すひつ
(三)　こして　すみもてわたるもいとつき〱し　ひるに成・てぬるくゆるひもていけは・・・火おけの火もしろきはいかち
(能)　ぬるは
(三)　になりて・・わろし

まず両本の漢字表記の相違を見てみよう。三巻本で漢字表記でありながら能因本では平仮名表記のものを挙げてみると、

成―なり　行―ゆく　也―なり　飛―とひ　ね所―ねところ　三、四、二―みつ、よつ、ふたつ　音―おと　成―なり
行―いけ

三巻本が平仮名で能因本が漢字表記の例は、

ゆふ日―夕日　おと―音　むし―虫　ね―音　いけ―行け

このような現象は両本が筆写される過程で人々によって手を入れられたことが反映しているのであろう。

初段の構成を見れば「春はあけほの」「夏はよる」「秋は夕暮」「冬はつとめて」と、春夏秋冬の四つの季節がその推移する順序どおり並べられている。しかしそこで記される内容は、漢籍や『古今和歌集』を初めとする和歌的教養と一線を画したものであるという指摘は先学によっても多くなされてきた。(注八) しかしながらこのことを従来の伝統に対する清少納言の個人的感情の発露として今まで読まれ享受されてきたが、宮仕えを始めてたかだか二年目の彼女の個人的な嗜好が公にされることがあるとは到底思われない。そこには当然のごとく中宮定子に対する慰安の心遣いが背後にあったと今まで述べてきた。だから中関白家が中央政界でその権威を失墜し定子が崩御した時には『枕草子』の存在価値は著しく下落したものと思われる。そしてその使命を終えた『枕草子』は、その性質上前章でも述べたように他者による安易な本文改竄を許すことになった。『紫式部日記』に見られる清少納言への辛辣な批評は、権力の後ろ盾を失ったものへ向けたもので、『枕草子』の複雑な成立過程と本文の乱れは、こういう視点が欠落していては解明できないと思われるのである。

さて、春の条はあまりにも有名ではあるが、三巻本のこの箇所は一類本を欠いていることを考慮しなければならない。新日本古典文学大系（渡辺 実 校注）は「内閣文庫蔵本」を底本としていて「春は曙。やう〳〵しろくなり行、やまぎはすこしあかりて、むらさきだちたるくものほそくたなびきたる」と表記されている。しかし日本古典文学全集本（校注・訳 松尾聰 永井和子）では「春はあけぼの。やうやうしろくなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる」というように改めている。活字化されているテキストは原文とは異なっていることが多く、安易に本文を信用することは危険である。その凡例を確認していても我々は『枕草子』そのものとは異なる文体を真実と思い込んで享受してしまう可能性が常につきまとう。これは他の古典作品すべてに通じることであり、教科書で作品を読むときの盲点となっている。例えば、原本を目にして初めて三巻本には「やうやうしろく成行山きは」とあり、能因本では「やうやうしろくなりゆく山きは」とあることを知る。ところが活字化されるときには、読みやすく加工された本文を原文そのものと信じて読むことになるので、我々は両者の違いの重要な点を見落とすことにもなる。「春はあけほの」の段における三巻本と能因本での漢字の使用の割合を『校本枕草子』によって調査すると、

三巻本――四十二個（全文字数 二百四十七字・十七％）
能因本――三十二個（全文字数 二百七十六字・十一、六％）

という結果になり、三巻本の漢字使用頻度の高いことが分かる。いま原本の存在を想定した場合、それを書写していく過程で人は漢字を平仮名に変換しようとするのか、それとも平仮名を漢字に変換しようとするのか何れであろうか。もちろんそれは書写する人物の性別や教養等いろいろな条件によるだろうが、後になるほど漢字に変換しようとする傾向が生じるのではないだろう

か。そうだとすれば三巻本がこの章段において果たして原態を保っているかどうかは注意しなければならない。先にも述べたが、この違いは二系統の本文書写に異なる人物が関わっていることを窺わせる。

さて、次の夏の条に目を向けよう。

(能)　　　　　　なり　　　・・・とひ　　　・・・・・・・・・・・・・・・・
(三)　夏はよる。月の比はさら也・　やみも猶ほたるの多く飛・ちかひたる　又たゝ一二なとほのかにうち光りて行もをかし
(能)　の　さへお
(三)　雨なと・ふるも・をかし。

両者を比較すると、能因本が三巻本に比して「蛍」の描写が極めて簡素化されていることに気付く。三巻本には存在する「又たゝ一二なとほのかにうち光りて行もをかし」という印象的な描写が、能因本では欠落している。三巻本を分析すれば、その記述は明らかに「多く飛ちかひたる」と「又たゝ一二なとほのかにうち光りて行もをかし」を対句として配置した構成になっている。その印象的な表現技巧を欠如する能因本が、三巻本の再稿本であるという先学の説を当てはめた場合、この現象を合理的に説明できるだろうか。むしろ能因本のほうが原初的な姿で、三巻本はその原文に手を加えたものなのではないかと考えるほうが自然であろう。その逆は考えにくい。このような現象は三巻本と能因本を比較する過程で、あちこちに見出せるのである。もちろんその逆のケースもこれまた多数見出されることは先学の報告にもあるとおりである。しかし三巻本優位説に立ち、能因本を無視するならそれらの問題点は葬り去られることになる。この箇所には三巻本の一類本は存在していないが、その内容をわずかばかり伝えるものとして、『枕草子抜書本』という本がある。『枕草子抜書本』はその名の通り『枕草子』の抜書きなのだが、その内容は比較的一類本の面影を遺した本であるといわれ、その抜書本を参照すると、

闇も猶蛍のおほくとひちかひたる又たゝ一ふたつほのかにうち光てゆくもをかし　（『校本　枕草子抜書本』三頁）

とあり、現存の二類本と似通った表現である。ということはやはり一類本も現存する二類本とほぼ同じ表現であったことが推測される。ここでは能因本の方に原『枕草子』の姿が残存しているといえよう。

「ほたる」に関する記述は、『枕草子』には他に第五十段「むしは」に

むしはす、むしひくらしてう（蝶）松虫きり〳〵すはたおりわれからひをむし蛍みのむしいとあはれ也

の一例が見られる。そこでは蛍に関して特別な感慨は何も記されていない。現代人は蛍に特別な感情を抱きがちであるが、夏になれば毎夜飛び交う蛍を見慣れている平安貴族にとり、われわれ現代人の感覚を持ち込むことは危険である。能因本も三巻本とここはほとんど異同はない。五十段での蛍に対する淡白な記述の姿勢は能因本に近い気がする。三巻本の蛍の描写は、現代人に情緒的に訴えるものを持っているが、果たして清少納言がそのように記したかには再検証が必要ではないかと考えている。

「蛍」に関して、そのほかの先行する他の諸作品を参照すると『伊勢物語』三十九段に、天の下の色好み「源の至（いたる）」が女車の中に蛍を放ち、その女の姿を見ようとするエピソードが語られる。また『うつほ物語』には四箇所に蛍の記述が見られる。

① 藤英（とうえい）くれなゐの涙をながして、はづかしくかなしとおもひて、夏はほたるをすゞしきふくろにおほくいれて、ふみのうへにをきてまどろまず　（祭使四三二）

② ひかりをとぢつる夕べは、くさむらのほたるをあつめ、ふゆは雪をつどへて、　（同四四二）

③ ほたる、をはします御まへわたりに、三・四つれてとびありく。
ころもうすみ袖のうちよりみゆるひはみつしほたるるあまやすむらん　（内侍の督八五七）

④ よるはほたるをあつめて学問をしはべりし時に、　（国譲下一五七二）

（宇津保物語研究会編『宇津保物語　本文と索引　本文編』（数字は頁数）笠間書院）

③の「内侍の督」の例は内侍の督を蛍の光で見ようとしたもので、『伊勢物語』からの影響が濃厚である。また注目すべきは「三・四つれてとびありく」という表現は、三巻本『枕草子』との関連があるかもしれない。その場合能因本に何故その影響が

ないのか、新たな疑問が浮上してくる。それ以外のものは恐らく『蒙救』の「孫康映雪（そんこうえいせつ）」「車胤聚蛍（しゃいんしゅうけい）」の故事を基として記されたものであろう。

次に秋の条に目を移すと、

（能）　夕・　花やかに　山きは　く

（三）　秋は夕暮。ゆふ日の・・・・さして、山の端いとちかうなりたるに、

能因本の「夕（ゆふへ）」に対して三巻本は「夕暮れ」となっている。「夕」という語は平安時代には文章語・歌語と意識されていて、漢文訓読体や和歌、『源氏物語』などの限られた和文作品に使われている。それに対して「夕暮れ」は日常的に使用される語として意識されている。ここもどちらが元の形であったかを決めることは困難であるし、初稿、再校のような関係で両者清少納言の手になった可能性もあるのだが、能因本が何故わざわざ特殊な語をここで使用したのかは分からない。ただ「春はあけほの」「夏はよる」「冬はつとめて」がいづれも七音、五音、七音でリズムが良いのに比べると、「秋はゆふへ」は六音でなんとなく落ち着きが悪く違和感がある。初稿は能因本のような形であったが、その落ち着きの悪さから手が加えられた形が三巻本の今の形なのではないだろうか。

次に「山きは」に対して三巻本は「山の端」と異なっている。「山際」は空が山に接する部分で、山を含まない領域を指し、それに対して「山の端」は山の稜線、山の輪郭部を指すので、[注九]ここには三巻本と能因本の間に明確な違いが存在することになる。しかしこの両者の違いの優劣については諸説いまだに確定したものは無いようである。ただ、江戸時代に流布した能因本系の『春曙抄』が、「山の端」に改めているので、従来「山の端」の本文が一般的に人々に親しまれてきたという事情がある。『春曙抄』が「山の端」に改めた理由ははっきりはしないが、『句題和歌（別名・大江千里集）』寛平六年（八九四）には次の歌のあることが知られている。

秋の日は山の端近し暮れぬ間に母に見えなむいそげあが駒

これらの平安朝期の用例を見ると、三巻本の「山の端」のほうが一見よいようにも思える。しかし、三巻本の本文を採った場合に「夕日が山の端に近くなっている」と訳したくなるが、そうではなくて「山の端が夕日に近くなっている」と訳すべきなのだ

といわれている。このことについては松尾聰先生が

「体言＋近クナル」という形のことばは、私の気のついたかぎりでは、中古の仮名文学において、その「体言」が明らかに主語であるものか、または主語であるとみてさしつかえないものばかりのようである。それで私は「山の端近し」を「山の端が（日に）近いという状態だ」という意に解けないだろうか、つまり「夕日がさして今や、山の端がたいそう夕日に近い状態になっているころ」と解いてみようというのである。(注十)

と主張なさっていて、他書においても、

題知らず　読人知らず

野辺近く家居しせれば鶯のなくなる声はあさなあさな聞く　（古今和歌集　春歌上　十六）

この歌も「野辺に近く」の「に」が省略されたのではなく「野辺」と「近く」は主語述語の関係にあると見るべきであろう。「野辺が近いという位置で私は家居しているから」の意である。(注十一)

と注意を喚起している。そこで平安朝での「山の端」と「山際」を調査してみたものが次の項目である。

まず『うつほ物語』を見ると、

「山の端」

① いりぬれば影も残らぬ山の端に宿まどはしてなげく旅人（「俊蔭」三九）
② あさかげにはるかに見れば山の端に残れる月もうれしかりけり（「春日詣」二七一）
③ 谷深くおりゐる雲のたちいでつなど山の端をもとめざるらん（「吹上　上」五四七）
⑤ かかるほどに、十九日の月、山の端よりわづかに見ゆ。（国譲　中」一四七五）

これらの用例ではいづれも「山の端」に助詞が付き、『枕草子』の参考にはならないようである。

次に「山際」について調べてみよう。当時この語には二つの意味があった。岩波の「古語辞典」には、

①山の稜線　②山の裾　麓

と説明がなされている。実際の用例を『宇津保物語』で検証すると、

「山際」

① 南の庭の、はるかなる水のすはまのあなた、山際にたてる二つの楼の、なかみまばかりをいと高きそりはしのたかきにして、北南にはらうのかうしかきたり。（「楼の上　上」一七六九）

（頁数はいずれも「『宇津保物語』本文と索引編」笠間書院刊の「本文編」による）

ここで使用される「山際」は明らかに庭にある築山の裾という意味で使用されている。次に『源氏物語』に使用される「山の端」と「山際」を点検すると、

「山の端」

① 「山の端の心も知らでゆく月はうはの空にて影や絶えなむ」（山の稜線「男の心」がどんな気持ちでいるかも知らないで、追いかけて行く月（女）は、空の真ん中で正気もなく光「姿」を消してしまうのであろうか）（「新日本古典文学大系」『源氏物語』「夕顔」一一九　以下同）

② 「格子もさながら、入方の月の山の端近き程、とどめがたうものあはれなり」（「夕霧」九八）

③ 「夜深き月の明らかにさし出でて、山の端近き心ちするに、念誦いとあはれにし給て、」（「椎本」三四八）

④ 「山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御かたちのまほにうつくしげにて」（「総角」四二六）

⑤ 「ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や山の端ちかきやどにとまらぬ」（深夜の月を賞美しない人は、山の端に近いこの宿に泊まらないのか）（「手習」三五一）

⑥ 「山の端に入るまで月をながめ見んねやの板間もしるしありやと」（山の端に入るまで月を眺めてみよう、その甲斐あって「浮舟に」お会いできるかと）（「手習」三五二）

②「入方の月の山の端近き程」・③「夜深き月の明らかにさし出でて、山の端近き心ちするに」・⑤「ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や山の端ちかきやどにとまらぬ」この三つの用例を見ると、例えば②の場合は先の松尾説で解釈すると「入り方の月が、山の端が近い頃」となってしまい、二つの主格の存在はかえって文意を混乱させるように感じる。ここを自然に解釈しようとすれば、やはり「入り方の月が、山の端に近い頃」とすべきではないだろうか。他の用例もそのように解釈して不自然さは生じないように思われる。

「山際」

① 「夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが、鈍色なるを、何ごとも御目とどまらぬころなれど」（「薄雲」二三二）

② 「南の御前の山際より漕ぎ出でて、お前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜すこし散りまがふ」（「胡蝶」四〇五）

③ 「山際よりさし出づる日のはなやかなるにさしあひ、目もかかやく心ちする御さまの、」（山の稜線からさしはじめる朝日のはなやかな光に映えあって）（「若菜上」二五四）

④ 「山際より池の堤過ぐるほどのよそ目は、千歳をかねてあそぶ鶴の毛衣に思まがへらる」（「若菜上」二六三）

⑤ 「例は暮らしがたくのみ、霞める山際をながめわび給に、暮れゆくはわびしくのみ…」（「浮舟」二〇九）

①、③、⑤、特に①は『枕草子』を連想させるような情景描写であるが、②、④は『宇津保物語』の用例と同じように、「庭にある築山の裾」という意味で使用されている。ここで注意すべきことは、「山際近く」という表現はなされないが「山の端近く」という表現は五例中、三例に及んだということである。『源氏物語』の用例だけからいうならば、当時は三巻本の「山の端いとちかうなりたるに」という言い方の方が一般的であり、なおかつ「山の端にたいそう近くなっている時に」という解釈でよいということになる。ただしだからといって能因本の「山きはいとちかくなりたるに」の言い方が誤っているということではない。どちらが初稿で、再稿であるかとはまた別の問題であることは言うまでもない。

次に『今昔物語集』に現われた「山の端」と「山際」を点検してみよう。

「山の端」

① 「其のときに、山の端に日漸く入りて、海の面暗がりもていく」（巻一〇第七話）

② 「其の人の顔、初めて月の山の端より出るが如し」（巻一〇第三四話）
③ 「法師あながちにとどむれば、引き放ちがたき程に、日も山の端近く成りぬ」（巻一六第二〇話）
④ 「八月九日ばかりの月の、西の山の端近くなりたれば」（巻二三第一五話）
⑤ 「日も山の端近くなりて物心細げなり」（巻二七第一三話）

第一六、二三、二七巻の各例文は、「日が（も）山の端に近く成る」という解釈しか出来ないであろう。これらの用例からは松尾説のような解釈を必ずしも取らなくともよいように思われる。

「山際」

① 「山際ならば山も崩れかかりなむ、木も倒れてうちおそはれなんとす」（巻二六第一二話）
② 「女は貝拾いありくほどに、山際近き浜なれば、猿の海辺に居たりけるを、この女ども見て」（巻二九第三話）

（引用本文は「新日本古典文学大系」『今昔物語集』）

この「山際」はどちらも山裾という意味で使われている。『今昔物語集』のこの二つの用例はいづれも「山裾」の意で使われていることが分かる。平安朝人の感覚は現代人とは異なり、山というものを一つの塊と捉え、その外延部にあたる部分はすべて山際と捉えていたように思われる。しかしそういう捉え方は平安時代の後期には次第に変化し、「山際」は「山裾」の意として考えられるようになったのではないだろうか。江戸時代には、『椿説弓張月前四』に「既に東も白み、烏の森をはなれて鳴く声するに、山際紫立ちて、陽旭（はるのひ）少し出づるころ」という用例もあるのだが、日葡辞書に「Yamaguiua〈山すそ、あるいは、やまのふもと〉」とあることから推測すると、『椿説弓張月』は『枕草子』の影響を強く受けた表現であり、むしろ江戸時代には日葡辞書にあるような「山すそ、やまのふもと」という意味が一般的なものではなかったかと考えられる。そう考えてみると、『春曙抄』を著した北村季吟は、『源氏物語』の用例などを勘案し、また「山裾、麓」という江戸時代の語感から能因本の「山きは」を誤りと考え、三巻本の「山の端」の方を正しい記述とし、書き変えてしまったのではないかと推測される。

次に三巻本にある「からすのねと所へ行くとて三・四・二・みつ」について検討してみたい。ここは能因本では「みつよつふたつ」となっている。

（能）　夕・　花やかに　山きは　く　ところ　みつよつふたつ・・

（三）　秋は夕暮　ゆふ日の・・・・さして山の端いとちかうなりたるに　からすのね所・・へ行くとて　三・四・二・・みつ

（能）　ゆ・　は　し

（三）　なと　とひいそくさへあわれなり　まいて鴈なとの

三巻本の原文表記を直接目にすると、「三四二みつ」という奇妙な表現がなされている。一方能因本では「みつよつふたつ」とあり、この違いは三巻本・能因本の解釈上に当然違いが発生してくる。例えば萩谷朴氏の『枕草子解環』によれば、

秋は、夕暮（れが格別）。夕日が（花やかに）映えて、山の端にぐっと近づいたころに、烏が、塒へ帰るというので、三羽か四羽、（続いて）二羽、（そしてまた）三羽という風に、あわただしく飛ぶのすら、印象が深い。[注十二]

また、能因本系の注釈書である田中重太郎氏の『枕冊子全注釈』では、ここは

烏がねぐらへ帰るというので、三羽四羽、あるいは、二羽などと飛びゆくのまで（秋の夕暮れのあわれに添えて）心打たれる。

とあるが、これでは三巻本の記述に引きずられ過ぎた解釈になっている感がある。同じ能因本の注釈書である、松尾聡・永井和子校注『枕草子』は、

烏がねぐらへ行くというので、三つ四つ二つなど、飛んでいくのまでしみじみとした感じがする。

という口語訳のように、その情景を淡々と描写しただけの解釈が最も能因本本文の性格を反映しているであろう。

ところで、この箇所の記述は両系統のどちらがより本来の『枕草子』の姿なのだろうか。そこで先に引用した三巻本の一類本に近いと言われる『枕草子』の抜書本を参照すると、「みつよつふたつなと飛いそくさへ哀也」とある。このことから現存しな

い一類本のこの部分は、むしろ能因本の本文に近かったのではないかと考えられる。このことに関してはすでに楠道隆氏の論稿があり、氏は結論として「前田家本、堺本でも『三つ四つ二つ三つ』となっていて、現存本では能因本のみが『三つ四つ二つ』とで少数派となるが、三巻本の二類本は堺本系本文の影響を受けているので、この部分もその結果現存本文のような形になっている。それは抜書本のこともあり、一類本も能因本と同じ形をとっていたと考えられ、清少納言の書いた原文はむしろ能因本に近いのではないか」(注十三)、と判断されている。それが正しいとすれば、従来の三巻本中心の解釈は否定されることになる。つまり「三羽か四羽、(続いて)二羽、(そしてまた)三羽」というような鑑賞は否定され、ただ「三羽四羽二羽」の集団となった群れが塒(ねぐら)に向かって飛んでいく天然自然のありさまがそのまま描写されていることになる。蛍を描く場面でも能因本の簡潔な描写に対して、三巻本では「多く飛びちか」う、と「たゞ一二などほのかにうち光て行」く、と対句的な描写がなされていた。蛍の描写について一類本の本文がどのようなものであったかは疑問が残るが、簡潔な表現の能因本と、技巧を凝らす三巻本という両者の性格の違いがあるように感じられる。そしてそこから「春はあけほの」の段に限って言えば、能因本の方にこそ『枕草子』の原態が保存されているといえそうである。

最後に

菅原孝標女の『更級日記』の中の一節に、

「物語もとめて、見せよ〳〵」と母をせむれば、三条の宮に、親族なる人の、衛門の命婦とてさぶらひける、たづねて、文やりたれば、めづらしがりてよろこびて、御前のをおろしたるとて、わざとめでたきさうし(冊子)ども、硯の箱のふたにいれておこせたり。うれしくいみじくて、よるひるこれを見るよりうちはじめ、又〳〵も見まほしきに、ありもつかぬ都のほとりに、たれかは物語もとめ、見する人のあらむ。　(吉岡　曠　校注『更級日記』「新日本古典文学大系三八三頁」)

この箇所は『枕草子』関係の研究でも従来ほとんど問題にされてこなかったが、ここで登場する「三条の宮」というのは、一条天皇第一皇女脩子内親王のことである。ということは母は皇后定子である。現在多くの異本を有する『枕草子』であるが、清少納言の執筆した『枕草子』の決定稿ともいうべき最善本は、恐らくこの宮にこそ伝来していたはずである。そのことを確認して能因本『枕草子』の奥書の一節を引用すると

枕草子は、人ごとに持たれども、まことによき本は世にありがたき物なり。（中略）なほこの本もいとよく心よくもおぼえさぶらはず。さきの一条院の一品の宮の本とて見しこそ、めでたかりしか、と本に見えたり。

（引用本文は、松尾聡・永井和子 訳・注 笠間文庫『枕草子』［能因本］三六九頁）

ここでいう「一条院の一品の宮」とは、まさに今引用した『更級日記』の「一条天皇第一皇女脩子内親王」その人のことである。そう考えてもう一度『更級日記』の本文を読むと、作者はその宮から「わざとめでたきさうし（冊子）ども」をもらったというのである。この冊子とは一体何であったのだろうか。普通ここは物語類を頂戴したと考えられているようだ。だが不審なのは後で作者は長年の夢であった『源氏物語』を田舎から上京したおばにもらったときの記述に『源氏物語』以外の物語類を、「ざい中将、とほきみ、せり河、あさうづなどいう物語ども」といちいちその名称を細かく列挙していたことである。ではなぜここでは「わざとめでたき冊子」としか書いてないのだろうか。その理由はこの冊子が物語のカテゴリーに入らなかった定子皇后より伝来してきたまだ正式な名を持たなかった『枕草子』そのものではなかったか、というのが私の推測である。もしこの「わざとめでたき」と修飾されるものが物語であるなら、当然その名は書き記されたはずではないか。この推測が正しければ、菅原孝標女はもっとも正統な『枕草子』を入手し、目にしていたことになる。そうであるならその影響が『更級日記』にも表れている可能性がある。この両者の影響関係が証明されればこの推測が証明されることになろう。このことは今後の私の研究テーマの一つにしたいと考えている。また彼女の作品といわれる『浜松中納言物語』『夜の寝覚』などの作者論解明の糸口にもなる可能性を合わせて孕んでいよう。

さて今まで述べてきたことをまとめれば、三巻本と能因本の優劣がそれほど鮮明に判別できない現状では、『枕草子』を読むときに三巻本のみを絶対的に優位な本文として決めつけることは得策ではないということになる。三巻本を絶対視し、能因本を排除しようとする態度は『枕草子』という作品の実態をつかみ損なう危険が大きい。このことをこの小論の結論として今回はひとまず擱筆することにしたい。

注一　松尾聡・永井和子校注・訳『枕草子』日本古典文学全集　小学館・昭和四十九年
　　松尾聡・永井和子校注『枕草子』笠間書院・二〇〇八年
注二　池田亀鑑『国語と国文学』「清少納言枕草子の異本に関する研究」昭和三年一月
注三　楠道隆『枕草子異本研究』笠間書院・昭和四五年

注四　田中重太郎「諸本の伝流」岸上慎二編『枕草子必携』学燈社・昭和四十二年

注五　角川文庫（現在「角川ソフィア文庫」）『枕草子』の解説を参考とした。石田譲二訳注

注六　前掲『枕草子』三六四頁脚注　笠間書院・二〇〇八年

注七　『仏典解大事典』春秋社・一九八〇年

注八　上野理「「春曙」考」『文芸と批評』第二巻八号　昭和四四・四

藤本宗利『枕草子研究』Ⅰ類聚・随想的章段の本質　風間書房　二〇〇二年

注九　雁矢忠生『むらさき』第九巻第二号

注十　武蔵野文学』1　昭和三十年

注十一　『国文法入門』研究社・一七六頁

注十二　萩谷朴『枕草子解環』一、同朋舎出版　一九八一年発行

注十三　楠道隆　前掲書「三つ四つ二つ三つ」